

## 18世紀ドイツの職人遍歴

藤田幸一郎

職人遍歴がヨーロッパ手工業の伝統のひとつであったことはわが国でもよく知られているが、ゲーテの『ウィルヘルム・マイスターの徒弟時代』を挙げるまでもなく、それはとくにドイツに顕著な現象であった。イギリスでも職人遍歴の慣習はあったが、ブレンターノによれば、近代初期のイギリスの代表的産業となった毛織物工業では徒弟修業が通例7年の長きにおよぶかわりに、職人は一般に遍歴に出ることなく短期間で親方として独立することができた<sup>1)</sup>。またホブズボームも、「大陸におけるフランス旅行 (tour de France) あるいは遍歴義務 (Wanderpflicht) のような慣習はこちら〔ブリテン〕にはない<sup>2)</sup>。」と述べている。フランスの場合は、ドイツと同じように遍歴の慣習が18—19世紀にもかなり広範囲にみいだされ、職人の遍歴制度と儀礼にもドイツと共通するものが多いことはたしかである。だが、ブノワによれば、フランスの職人遍歴はとくにパリ以南の南フランスに限られており、北部と東部では遍歴慣行は一般的ではなかったといわれるし、遍歴が職人の義務として一般的に強制されたことはないようである<sup>3)</sup>。これに対してドイツでは、一部の地域を除いてほとんどドイツ全域に、しかもほとんどの職種の手工業に遍歴強制が導入された。そのため、ドイツでは職人遍歴は16—17世紀には手工業の不可欠の一要素をなし、遍歴ぬきに手工業について語る事が不可能なほどに重要な意味をもつことになった<sup>4)</sup>。

このように職人遍歴が国によって異なり、18世紀以前のイギリスでは遍歴がさかんでなかったとすれば、遍歴は若い職人の修業を目的とする「手工業の大学」であるというような素朴な議論は、たとえドイツで通用したことがあ

ったとしても、ヨーロッパ一般にあてはまらないことは明白である。ドイツ手工業遍歴の研究者エルカールも、そのような遍歴＝修業論をしりぞけるとともに、職人の旅行記にしばしばみられるような旅のロマンティシズムも否定し、むしろ遍歴は病氣、困窮、失業などとたたかわなければならぬ「苦難の日々」Mühsal des Alltags にほかならなかつたとみなしている<sup>5)</sup>。

遍歴が苦難にみちたものであったにもかかわらず、ドイツに普及した原因として一般に挙げられているのは、15—16世紀以降の手工業ツunftの閉鎖性の強化である<sup>6)</sup>。この点については、ほとんど異論の余地がないといってよいほど歴史家のあいだに見解の一致がみられる。つまり、この時期に都市手工業ツunftは新しい親方をうけいれる余地がないほどの飽和状態に達したため、職人の親方への昇格を延期ないし阻止すべく、彼らに遍歴を強制して都市の外に放出した。この点で職人遍歴は、ツunftによる職人追放の性格をもっていたというべきだろう。

そのため、ツunft親方と遍歴職人とのあいだにはしばしば鋭い対立が生じることになった。とくに18世紀は、「職人蜂起の時代」といわれるほどに、いたるところで遍歴職人集団の運動が頻発したことでしられる。なぜ18世紀に職人蜂起が未曾有の規模に達したのか、この問題を検討するうえで遍歴は重要な鍵を握っているようにおもわれる。職人蜂起と遍歴との関連をあきらかにするための手がかりとして、ここではさしあたって、職人たちがたどった遍歴路、彼らがつくりあげた遍歴圏の空間的な広がり、1世紀間の遍歴の数量的変動などをとりあげ、巨視的視角から18世紀ドイツの職人遍歴の基本問題に迫っていきたい。

## 1 遍歴コースの事例

各地を遍歴する職人がたどった行程は、相当広範囲に及んでいた。19世紀初期のハンブルクの左官職人ルードウィヒ・フリードリヒ・ヘンゼルの遍歴が、その一例をなす<sup>7)</sup>。彼は1822年に徒弟となり、27年5月に職人遍歴を開始し、31年4月にハンブルクに帰るまで4年間遍歴を続けた。その経路は、図1に

みられるように、東ドイツからメーレン、オーストリア、南ドイツ、中部ドイツ、デンマークと広範囲に及んでいることがわれわれの眼をひく。この間に、彼はコールベルクで3カ月、コペンハーゲンで1年、再びコールベルクで6カ月、最後にベルリンで4カ月働き、全体で3年1カ月の遍歴期間中のほぼ3分の2は働き、3分の1の期間は旅行している。ウィーン、ミュンヘン、フランクフルトなど南方への旅の途上ではまったく仕事についておらず、ベルリンから南の大旅行は結果としてはもっぱら漫遊の旅におわっている。

第2の例として、1803年から1816年まで13年間も遍歴を続けた麻織布職人ベンヤミン・リーデルのとったコースをみよう<sup>8)</sup>。彼は18歳でポーランドのポーゼン地方の小都市コピリンを出て、図2にみるとおり、北はオストプロイセンのケーニヒスブルク、南はバイエルンのニュルンベルクまで遍歴した。彼の場合、5年間に7つの都市で仕事についたが、当然ながらこの都市でも仕事にありつけたわけではなく、ニュルンベルクでは仕事がなく金に困ったため、やむをえずオーストリア軍の兵士に応募しようとしたが採用されなかった。またチューリヒャウでは発熱して病に倒れ、4カ月間床につかなければならなかった。彼は5年間の遍歴の後にいったん帰郷して、コピリンで親方資格と市民権を取得して妻を迎え所帯をもつように父親からすすめられたが、彼はこれをことわって再度の遍歴に出発した。彼の弁によれば、家をもつことは彼の望むところではなく、「11,246室のローマのパチカン」や花嫁よりも旅のほうに魅力を感じたからだという<sup>9)</sup>。

2度目の遍歴は、図3にみるように、前回よりはるかに広範囲におよび、経路も複雑である。この図では、1812年から16年までの遍歴はほとんど北ドイツ内部の循環なので、省略されている。この2度目の遍歴を示した図3と先にみた図1および2から、一定の遍歴経路をみいだすことは不可能であるといつてよい。リーデルの旅日記を読んでも、どのような方向に進路をとるべきかについての手工業規則や習慣があったとは考えられず、遍歴コースの選択と決定はそのときどきの気分や偶然によって左右されたといわざるをえない。たとえば、リーデルはウィーンで絵描き職人と出会い、彼と一緒にイタリアへ行く約

図1 ハンブルク左官職人ヘンゼルの遍歴コース (1822—27年)



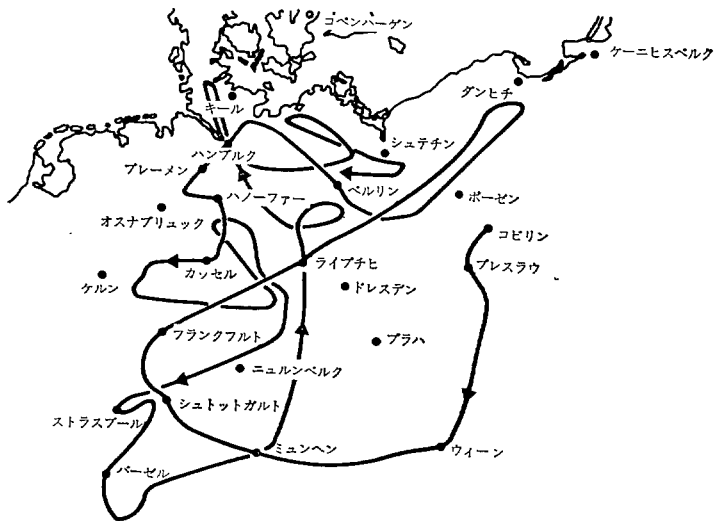
束をしたが、約束の時間に彼があらわれなかったため、やむなくイタリア行きを断念した。またパーデンのカールスルーエでは、旅の途中で知り合った仲間職人と一緒にフランスのリヨンに行こうとしたが、フランス大使館から入国許可をもらえず、ストラスブール行きを認められた仲間職人と別れてひとりで東方へ帰ることにした<sup>10)</sup>。

遍歴自体は職人が避けてとおることのできない義務として課せられていたが、どのような遍歴路を選択するかは職人の自由意志にゆだねられていたと考えられる。この点で、ドイツの遍歴には、南フランスのリヨン——マルセイユ——ポルドー——ナント——オルレアンを巡回する「ツール・ド・フランス」のような特定の遍歴コースはなかったといってもよく、東はポーランドを越えてラトビアのリガ、北はデンマークのコペンハーゲンやスウェーデンのストックホルム、南はスイスのベルン、西はオランダのアムステルダムやフランス東部にいたる中央ヨーロッパ全体におよんでいた。遍歴職人には、国境は存在しない

図2 リーデルの第一回の遍歴コース (1803—08年)



図3 リーデルの第二回の遍歴コース (1808—12年) (1812年の途中から省略)



も同然だったといってよい。ただ、多くの遍歴職人が好んで訪れたのは有名な帝国都市、大都市であり、上掲の3つの図にもみられるように、北ドイツのハ

ンプルク、東ドイツのベルリンとドレスラウ、中部ドイツのライプチヒ、ライン流域のフランクフルト・アム・マイン、南ドイツのニュルンベルク、ミュンヘン等を、遍歴の主要都市として挙げるができる。

リーデルが遍歴を終えたのは、1816年のことである。この年、彼はポーゼン地方のツェーデンという小都市で働いている折りに、仕立て屋親方の娘シャルロッテとしりあい、彼女の両親から結婚の許可を得て、親方資格と市民権を取得し、16年間の遍歴生活に終止符をうった。彼がこの町で親方の娘と結婚して親方となれたのは、幸運というべきだった。というのは、彼の故郷コピリンで職人宿をいとなんでいたこともある父親は1814年に亡くなり、母もすでに1797年に亡くなっており、兄や姉も町を去り、彼がコピリンに帰っても首尾よく親方になれたとはかぎらないからである<sup>11)</sup>。

## 2 製本職人の遍歴圏

職人がどのような遍歴路を選択するかは彼の自由意志にまかせられていたとすれば、職人たちがたどった道は無数にありうることになり、個別遍歴事例の積み重ねから遍歴の全体像を得ることは不可能である。そのため、職人遍歴の地理的範囲の研究では、ある都市を訪れる職人の出身地を調べる定点観測法ともいべき方法が一般には採用されている<sup>12)</sup>。その史料としては、各都市の職人宿の宿帳あるいは職人組合の職人帳を利用することができる。たとえばオスナブリュックの製本職人帳には、一般に次のような形式で遍歴職人が登録されている。

「1772年6月7日。

私 J・L はウィーンに生まれ、ブレーメンからオスナブリュックに参りました。親方 B・Z からたまわった名誉とご厚意に心より感謝いたします。」

ここから職人の登録年月日、氏名、出生地、雇われた親方の名前等を知ることができるだろう。そこで、とくに複数の都市の遍歴資料が得られる製本職人の遍歴圏について、比較検討してみよう。ここでとりあげるのは、すでに遍歴史料の調査結果が刊行されている北ドイツのキールと西南ドイツのフランクフ

ルト、筆者が史料調査をおこなった西北ドイツのオスナブリュック、これら3都市である<sup>13)</sup>。

製本業は、ドイツの手工業のなかでは就業人口の少ない職種である。それは、レルナーのいうように、製本業が大学や宮廷などのある都市に限られていたためである<sup>14)</sup>。フランクフルトでも、1762年には親方数31人、職人数15人にすぎず、職人数がわかる32の手工業職種のうち23番目に位置していた。製本業は手工業としてそれほど重要な地位を占めていなかったが、どのような小都市にもみられる職種ではなかっただけにかえて職人の遍歴も地理的に広範囲におよび、その意味で職人遍歴の特徴をよくあらわす職種だったといつてよい。実際、製本業は古来よりいわゆる「贈与をうける手工業」geschenktes Handwerkに属し、遍歴職人は遍歴の途上で職人宿での無料の宿泊と食事の提供を受け、旅費も支給される権利を有し、ツunftと職人組織は「歓迎の杯」Willkommenと呼ばれる銀杯を有し、酒宴を開いて客人をもてなすのが慣わしとなっていた<sup>15)</sup>。

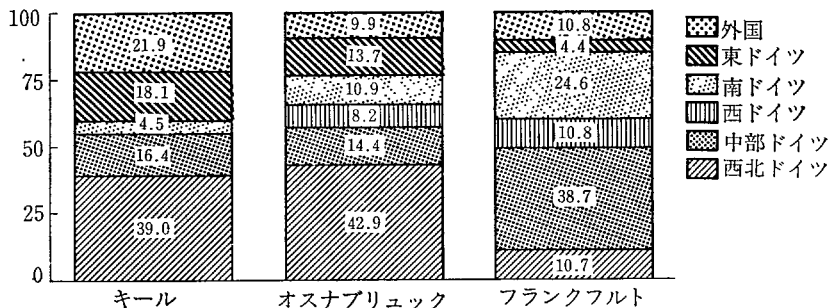
こうした製本業の職人遍歴の距離を示したのが、図4である。キールの製本職人の遍歴距離については、不明である。フランクフルトの場合は、100キロ圏内からの短距離移動者が全職人の7割を占めるのに対して、200キロを超える移動者は1割にも満たない。他方、オスナブリュックの場合は遠距離移動者の割合が高くなっている。両都市間の距離は300キロ弱なので、北のオスナブリュックと南のフランクフルトの間の職人の相互交流は非常に少なかったことを確認することができる。

次に、各都市の製本職人がどの地方からやって来たかを示したのが、図5である。ここでも、フランクフルト製本職人の7割以上が同市周辺の中部、西および南ドイツから来ており、フランクフルトが遠方のドイツ北部や東部から疎遠であったことをしりうる。他方、北のキールとオスナブリュックには一定の共通性が認められ、両市とも西北ドイツを中心に東ドイツ、中部ドイツからもかなりの職人をひきよせている。キールの場合は、とくにスカンジナビア諸国からの遍歴が比較的多いことが、きわだった特徴をなす。





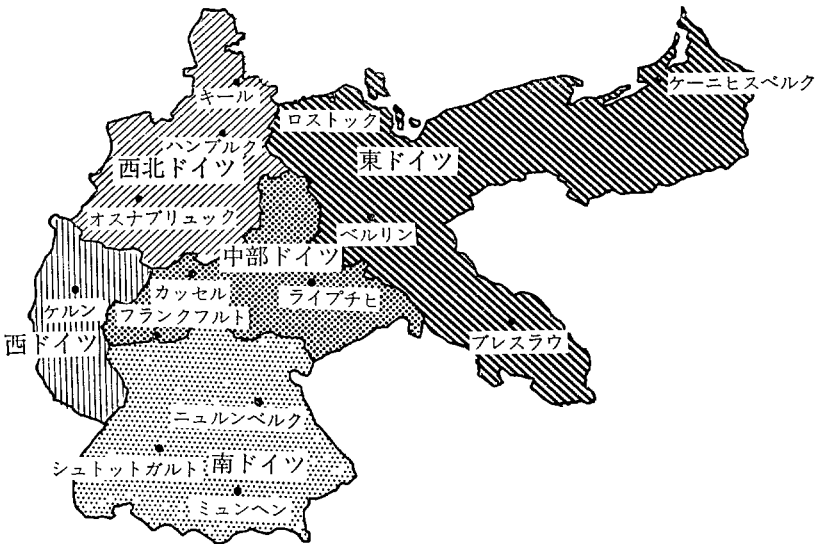
図 5-1 製本職人の出生地別比率



こうしてみると、第1にドイツ北部と南部とのあいだの職人交流はそれほど活発ではなかったことが、うかがわれよう。現在まで、相対的に独立した遍歴圏を明示する研究結果は提出されていない<sup>16)</sup>が、製本職人の遍歴をみるかぎりでは、ドイツの南北間の職人交流はあまりさかんではなく、両者は相対的に独立した遍歴圏を形成していたのではないかという仮説をたてることも可能とおもわれる。すなわち、一方でオストプロイセンやシュレージエンも含む東ドイツ全体、ザクセン、アンハルト、チューリンゲンなどの中部ドイツ、ウェストファーレン北部からニーダザクセンを経てデンマークにもいたる西北ドイツ、これら3地域全体を包括する北ドイツを一大遍歴圏とすれば、ラインの中・上流域からバイエルン、スイスにいたる南ドイツを第二の遍歴圏とみることも不可能ではない。シュルツの14—17世紀ライン上流域の遍歴圏についての研究成果をみても、バーゼル、シュトラースブルク、フライブルクへの職人遍歴は南ドイツのライン上流域を中心とする遍歴圏に限定されており、北ドイツからの遍歴はほとんど認められない<sup>17)</sup>。

この南北にわかれた2つの遍歴圏の仮説は、前掲の左官職人ヘンゼルと麻織布職人リーデルの遍歴路を示した図1~3と矛盾しているようにもみえる。両者とも北から南へ遍歴しているからである。しかし、その場合、2人とも南ドイツではほとんど仕事についておらず、ただ旅行をしたにすぎないことに注意すべきである。ヘンゼルの場合、3年11カ月の遍歴期間中南ドイツに滞在し

図5-2 職人出生地の地域区分



## 地域区分の概要

東ドイツ—オストプロイセン、ウエストプロイセン、ポメルン、シュレージエン、ブランデンブルク、メクレンブルク

西北ドイツ—シュレスウィヒ・ホルシュタイン、ニーダーザクセン、北ウエストファーレン

中部ドイツ—ザクセン、プロイセン領ザクセン、アンハルト、チューリンゲン、ヘッセン

西ドイツ—南ウエストファーレン、ラインラント、ファルツ

南ドイツ—バイエルン、ウエルテンベルク、バーデン

(ただし、フランクフルト製本職人統計では、メクレンブルクが西北ドイツに、北ウエストファーレンが西ドイツに分類されているため、若干の誤差がある。)

ていたのはわずかに1カ月であり、残りの期間はすべて北ドイツで生活していた。またリーデルも、1度だけカールスルーエで仕事についてのを例外として、2回の遍歴とも南ドイツやスイス、オーストリアを足早にみてまわっただけで、13年間の大部分を北ドイツですごした。したがって、南北間に遍歴はおこなわれたが、それは手工業労働を目的とする遍歴というより、主として見聞をひろめるための観光旅行だったといえることができる。

第2に指摘しなければならないのは、3都市いずれにおいても西ドイツから

の遍歴が非常に少ないということであり、とくにキールでは皆無である。図5-2に示したように、ここで「西ドイツ」というとき、通念とはやや異なり、ラインラント、ファルツおよびウェストファーレンのリップ川以南の地域を指しており、ウェストファーレン北部はこれとは別に西北ドイツに分類されている。通常おこなわれているように、ウェストファーレンを一括して「西ドイツ」に属する地域として処理していれば、「西ドイツ」からキールとオスナブリュックへの製本職人の遍歴ははるかに多くなったはずである。通念に反してウェストファーレンを南北に分け、北部を西北ドイツに、南部を西ドイツに分類したのは、次のような事情によるものである。

ドイツの職人遍歴を地域ごとに丹念に観察していくと、不思議な現象にぶつかる。それは、ライン下流域から他の地域へ遍歴に出る職人が異常に少ないだけでなく、他地域からここへやってくる職人もまた少ないというドイツでは希有な現象である。前掲の職人ヘンゼルとリーデルの遍歴経路をみても、2人ともニーダーラインには足を踏み入れていない。また、ニーダーラインのすぐ東側のヘッセン・カッセルについてのライニングハウスの研究でも、カッセルの職人組織は南にマールブルク→フランクフルトのルート、北にブラウンシュヴァイクへのルート、東にライプチヒ→ドレスデン→プレスラウのルートの連絡網を形成していたが、西のウェストファーレンへのルートは存在しなかった<sup>18)</sup>。遍歴職人たちはなぜかニーダーラインを避けて通っているのである。

ニーダーラインに遍歴の慣習が定着しなかったことをうらづける有力な証言は、ほかにもある。ラインとウェストファーレンの手工業史を研究したブルンスは、職人の遍歴義務は16世紀までにはこの地域にも普及したにもかかわらず、ニーダーラインのクレウエ・マルクの手工業史料には遍歴期間についての規則をみいだすことはできなかつたと、述べている<sup>19)</sup>。事実、マルク地方の諸都市のツフフト手工業の規約を調べてみても、遍歴強制にかんする規定をみいだすことは困難である<sup>20)</sup>。マルクの中心的商工業都市イザーローンでは、手工業の遍歴強制について語った文献はこれまでのところみあたらない。イザーローンの主要産業である針金製造業や青銅加工業の鍛冶職人がドイツ各地を遍

歴したり、よそから多くの遍歴職人がきたというような記録も残されていないようである。したがって、金属手工業職人の大部分はマルク地方出身者からなっていたとほぼまちがいあるまい。このような事態は、18世紀のドイツの手工業では例外といってよいほど珍しい現象である。ところが、同じウェストファーレンでもリップレ川を越えて北のミュンスターラントに入ると、職人遍歴慣行と遍歴強制は疑いもなく存在しており、ミュンスター、オスナブリュック、ミンデン等の諸都市間の職人の往来は非常に活発で、この流れはブレーメンにつながっていた<sup>21)</sup>。

また、ライン下流域の中心都市ケルンの手工業史にかんするレンツェンの博士論文<sup>22)</sup>によれば、ケルンでは17世紀まで遍歴強制は存在せず、たとえば大工と石工の場合、4年間の徒弟修業と2年間の職人期間が規定されていたにとどまる。遍歴強制がケルンに一般的に導入されたのは、この都市の経済的衰退が顕著になった18世紀のことであり、製本業では1713年に遍歴強制が導入されたという。つまり、他のドイツ諸地域より2—3世紀も遅れて導入されたわけである。したがって、図4でオスナブリュックとフランクフルトへの西ドイツ出身の遍歴職人の比率がともに10%を越えているのは、18世紀の遍歴強制の導入の結果と考えられるが、それでも他の近隣地域からの遍歴と比べれば非常に低い数値というべきである。

古くは14世紀にもさかのぼる職人の広域遍歴網の形成にもかかわらず、ニーダーラインだけはマルクも含めてこれから遮断され、いわば遍歴の真空地帯をなしていたことは、こうした事実からみてほぼ疑いない。それは、ドイツ手工業史研究の盲点といってよい。しかも、「職人蜂起の時代」といわれる18世紀には職人運動の波がドイツのほとんど全域にひろがりをみせたにもかかわらず、ニーダーラインだけは職人組合があまり結成されず、手工業における職人固有の運動の展開もみられない。ニーダーラインにおける遍歴強制の導入の遅れ、職人組合とその運動の欠如は、この地域の社会・経済構造が他のドイツ諸地域とは異なった性格をもっていたことを暗示するものであろう。だとすれば、ニーダーラインとその他のドイツ諸地域の手工業を比較することによって、遍

歴強制を基盤とするドイツの「古き手工業」の歴史的特質をあきらかにする有力な手がかりも得られるはずである。だが、ここでは問題提示にとどめて、その考察は別の機会にゆずり、3都市の製本職人の遍歴の枠内で議論をすすめていくことにしよう。

### 3 職人遍歴と失業の増加傾向

これまでの検討によって、製本職人には南北2つの遍歴圏とこれから独立した西ドイツの遍歴空白地帯が存在したであろうという仮説を導きだすことができた。次に、3都市の年間製本職人数の時期的変動について検討してみよう。

図6は、各都市を訪れた製本職人遍歴者数および就職者数の変化を示している。遍歴者数とは、都市の職人宿を訪ねて、職人帳に氏名を登録した外来職人のことであり、仕事に就いて親方のもとで働いた者、仕事をさがしたがみつからず旅費の補助をうけてすぐに都市を去っていった者、両者を含んでいる。ただし、1780年代までのオスナブリュックの職人帳は、仕事を得ることができた職人名しか記載していないので、90年頃までの数字はほぼ就職者数と一致する。

図6から判明することは、第1に遍歴者数の変動は都市ごとに異なるが、1760年代に3都市とも遍歴者数が減少し、フランクフルトとオスナブリュックの2都市では90年代にも顕著な減少がみられるということである。これは、1756—63年の7年戦争、1789年以後のフランス革命とナポレオン戦争の時期とほぼ一致する。キールはフランスから遠く離れ、フランス革命の直接的影響をうけにくかったために、90年代には減少がみられないが、1810年代になって減少しているのはやはりナポレオン戦争の影響であろう。戦争による生命の危険を避けるために、職人たちは遍歴をさしひかえたものとみられる。戦争の時期には就職者数も同じように減少しており、戦争による経済活動の攪乱と不況が遍歴職人の生活を直撃したことをみてとることができよう。

第2に注目すべきは、とくにキールとオスナブリュックでは1780年代より顕著な遍歴の増加が認められることである。フランクフルトはフランス国境に近く、ナポレオン戦争の大きな影響をうけたため、80年代に増加しはじめた

図6-1 製本職人の遍歴と就職 (キール)

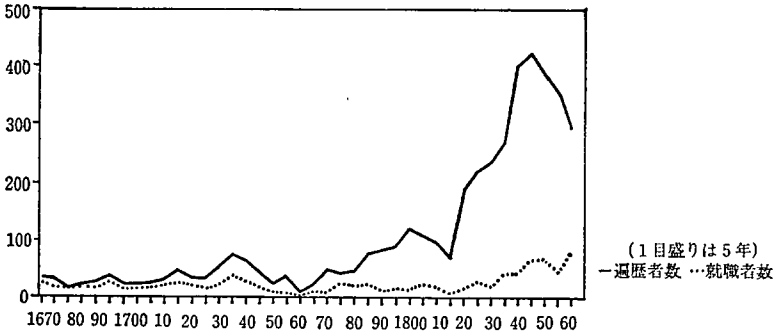


図6-2 製本職人の遍歴と就職 (フランクフルト)

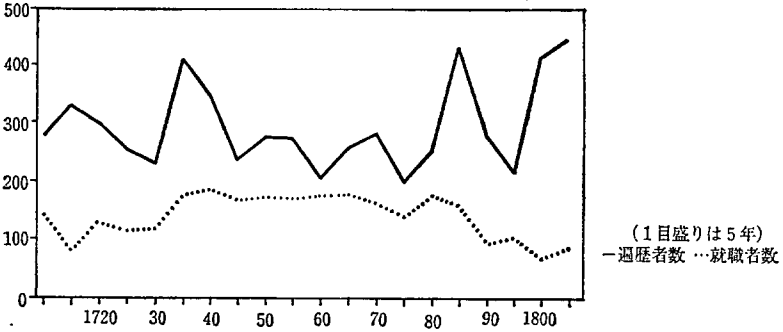
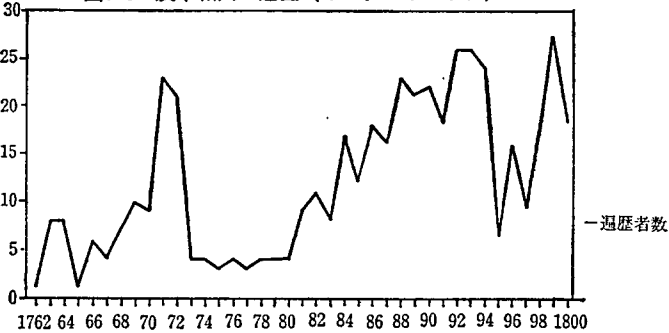


図6-3 製本職人の遍歴 (オスナブリュック)



遍歴職人数は90年代に減少に転じたが、19世紀にはいって再び増加傾向を示し、この図では示されていないものの1830年代には毎年400—500人もの遍歴職人が来訪した。したがって、革命と戦争による攪乱を別とすれば、製本職人の遍歴は1780年代より顕著な増加傾向を示し、19世紀前半にもこの増勢は継続したと結論してもよい。その増加率は、キールにみられるようになっていくほどの大きさに達し、18世紀末期に職人遍歴規模が一大転換期を迎えたことを示すものとなっている。

この時期になってはじめて製本職人の遍歴義務が一般的に導入されたわけではないから、遍歴の増加はツunftの強制によってもたらされたものではあるまい。むしろ、この時期より手工業ツunftの強制力は一般に弛緩する傾向にあった。というのは、イギリスの産業革命によってドイツの商工業はヨーロッパ市場で苦境に立たされただけでなく、ドイツの諸邦はイギリスやフランスへの対抗策として、プロイセンはじめ「重商主義」的國家干渉を強化し、ツunft特権を制限する政策を推進したからである。19世紀初期にナポレオンがライン連邦に導入した「営業の自由」、1810年のプロイセン政府による「営業の自由」が、このツunft解体過程を決定づけたことは周知の事実である。したがって、18世紀末期の職人遍歴の増加はツunft特権の解体と並行して進み、その意味で遍歴職人の未曾有の増加はツunft強制から「営業の自由」へ向けてのドイツ手工業の転換期を象徴するものでもあった。

こうした遍歴の増加にともなって、失業者の数もふえていく傾向を示した。図7は、都市を訪れた遍歴製本職人のうち仕事に就いた者の比率の変化を示したものである。製本職人の就職率はキールでは1670年代より早くも低落傾向を示しており、7年戦争後に一時的に回復したものの、80年代から再び減少に転じ、以後1840年代までほぼ20%以下の低水準に停滞したままである。フランクフルトでも1765年をピークにさがり続け、19世紀初期にはキールと同じような低水準におちこんでいる。18世紀後半の就職率の低下傾向は一目瞭然である。

18世紀初期までのキールでは、遍歴職人の3分の2は仕事を見つけること

、 図 7 製本職人の就職率

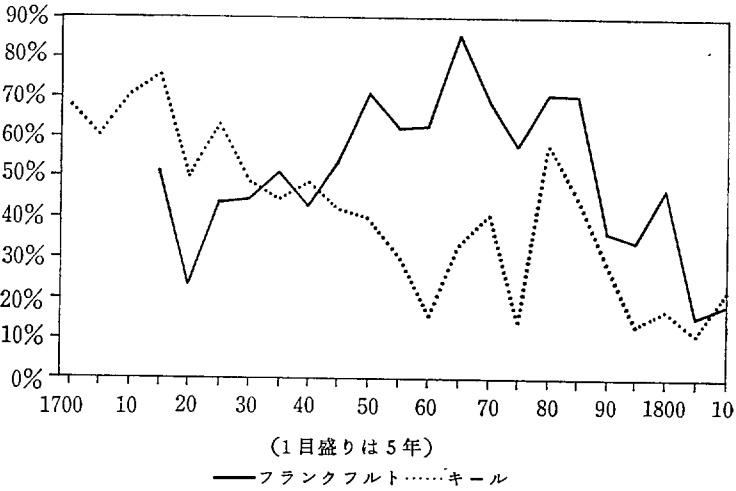
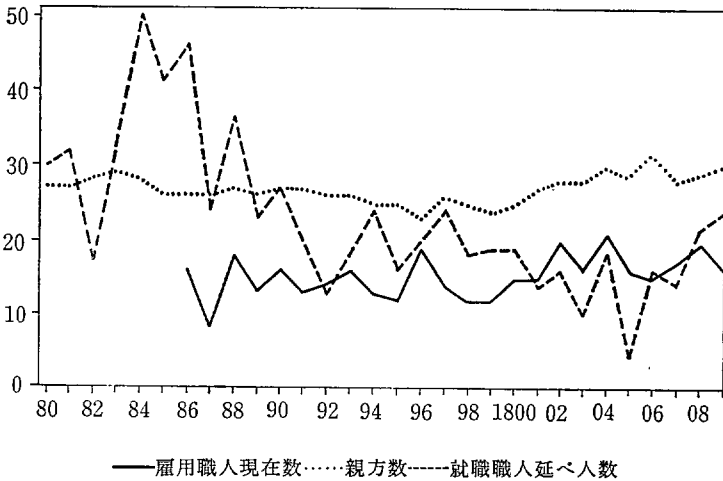


図 8 フランクフルト製本業雇用統計



ができたのに、18世紀末には5人に1人も就職できなくなったわけであるから、この間の変化は劇的であった。しかし、製本職人の就職率の低下は、図5で確認しうるように、都市の就労機会の激減よりも、むしろ主として遍歴職人



数の激増によってひきおこされたとおもわれる。ただし、職人遍歴の増加はかならずしも遍歴職人の絶対数の増加を意味するわけではなく、正確には職人の遍歴頻度の増加を意味する。というのは、ある都市の1年間の遍歴職人の統計上の総数とは、都市に来訪した職人の延べ人数のことであり、1人の職人が2度来訪すれば、それは2人と計算されるからである。これと同じく、就職者数も年間延べ人数を意味する。ある職人がひとつの職場に1年間ひきつづき留まって働くということは例外的にしかありえず、手工業経営の職人は絶えずいれかわっていたからである。

こうしたことを考慮して、もうすこし職人労働市場の実態に近づくために、図8を参照してみよう。ここからわかるように、フランクフルトでは親方数に大きな変動はなく、統計上の雇用職人数も変化が少ない。つまり、製本業の親方数は30人弱にほぼ一定しており、その雇用職人数も15人程度に限られており、製本業の労働力需要には大きな変化が認められない。これに対して供給は増加傾向を示し、しかも、1801年からは就職人数がすでに雇用されている職人数を下まわるようになる。これは、すでに雇用されている職人が新しく都市にきた遍歴職人に職場をゆずらなくなり、それだけ遍歴職人にとって就労機会が減ったことを意味する。以前には、常時15人の職人を必要とする製本業の職場に年間延べ人数で30—40人程度の遍歴職人が新たに参入してきたから、半年に1回は職人が交替し、それまでフランクフルトで働いていた職人は他都市へ移り、新たにやって来た遍歴職人がこれを補充していたわけである。ところが、職場における雇用職人の回転率は半年に1回から年1回以下にまで減少していき、その過程で雇用をめぐる遍歴職人どうしの競争が激化し、フランクフルトに仕事を求めてやって来た遍歴職人の多くは空しく去っていかねばならなかった。18世紀末期の失業率の増大は、このような変化のなかで起きた現象だったのである。

一部の職人がその職場に長期間留まれば留まるほど、他の職人の就労機会は減少し、これに反比例してその失業期間は長くならざるをえない。しかも、ツンフトの規則で一般に遍歴職人が都市で仕事をみつけれない場合は、ただち

にその都市を去らなければならなかったから、失業職人は都市から都市へと求職の旅を続けざるをえなかった。ここから、職人の放浪問題が生じてくる。実際に、遍歴職人からの放浪者への転落の例は、18世紀のバイエルンを中心とする南ドイツの放浪者について研究したC・キューターによっても、少なくなかったようであり、1786年にこの地域の2つの裁判所管区で逮捕された25人の放浪者のうち18人は手工業職人だったといわれている<sup>23)</sup>。

さきにみたリーデルの遍歴紀行でも、そうした事例をみることができる。彼がシュウェーフエンツの職人宿で出会った79歳の老職人は、故郷の町パウツェンを出てすでに59年間も異郷に身を置き、くにへ帰ってももはや町のやっかい者になるだけなので、いずこなりとも死ぬ覚悟はできていると語った。老職人は今なお毎日3—4マイルの道のりを歩くほど元気ではあったが、もう5年以上も仕事についていないといい、おそらく各地の職人宿を泊まり歩き、そこで寝食と旅費のほどこしをツunftと職人仲間からうけていたのであろう。リーデルが東ドイツのグンペンネンの職人宿で出会った老職人も、きびしい状況にあった。彼はグンペンネン生まれの釘鍛冶職人で、20年の遍歴を経てはるばる南ドイツのウィースバーデンから帰郷したばかりであったが、故郷の町に親戚はもはや誰も生きておらず、リーデルと一緒に再び旅だたなければならなかった<sup>24)</sup>。また、1787年にチューリングゲンのランゲンザルツェに生まれたパン職人クリスチアン・ウィルヘルム・ベヒシュテットの遍歴紀行によれば、彼は遍歴途上で「長靴小僧」というあだ名の62—3歳の老職人に会った。この職人はすでに30年間もの遍歴経験をもち、ブレーメンからプロイセン東方のメーメルを経て、さらにシュレージエンのプレスラウからチューリングゲンを通って再びブレーメンに戻る北ドイツ巡回コースをほぼ1年3カ月で定期的に旅する漂泊生活を続けていた。ベヒシュテットがこの老職人に職人宿で出会ったときは、彼はもう仕事はせず、もの乞いで暮していたが、身なりは清潔でしらみもたかっちはいなかったという<sup>25)</sup>。

そうした遍歴の長期化の事例をオスナブリュックの製本職人についてみるなら、表1に示されているとおり、1760—1800年の期間にこの都市に5年間に2

表 1 5 年間で以上遍歴を続けていた製本職人（オスナブリュック 1760—1800 年）

職人	出生地	オスナブリュック来訪年度							最初の来訪から最後の来訪までの遍歴期間
		1	2	3	4	5	6	7	
J.B.F	ツワイブリュッケン	1779	81	89	94	97	98	1800	21年4カ月
C.A.S	ベルリン	86	90	99					12年11カ月
J.A.F	ゾーリングゲン	81	83	90	91	92			11年
J.F.D	シュウェーリン	88	93	99					10年11カ月
C.L.S	ルンケル	74	79	84					10年8カ月
J.J.B	ゲッティングゲン	84	85	89	90	92	94		9年5カ月
S.G.B	グライフスワルト	73	76	81					8年
J.C.N	レーゲンスブルク	88	89	90	94				6年3カ月
L.C.M	オスナブリュック	80	85						5年2カ月
B.J	ミンデン	85	87	88	89	90			5年1カ月

回以上やって来た職人は、10人もいた。オーバーラインのツワイブリュッケン出身の職人は、21年4カ月の期間に7回も来ている。こうした長期間の遍歴職人の大部分は、親方に昇格することもできずに老齢化し生涯を終えなければならなかったであろう。

このような放浪職人の問題は、同時にツunft手工業の労働市場機構の問題でもあった。遍歴強制を基礎として形成されてきた手工業の労働市場は、7年戦争期まではその機能をはたし、遍歴職人の失業問題もさほど深刻ではなかったといえる。ところが今や、職人失業率と放浪職人の増加をとおして、その機能不全があきらかとなってきた。それは、「職人追放」の性格をもつ遍歴強制によって手工業経営の維持をはかってきたツunftにとっても重大な問題とならざるをえなかったはずである。だが、ツunft手工業における職人労働市場は歴史的に独特の性格をもっており、その検討は別の機会に譲らなければならない。

1) ルヨ・ブレンターノ（島崎晴哉・西岡幸泰訳）『現代労働組合論（上）』、1985年、117ページ。

2) E・J・ホブズボーム（鈴木幹久・永井義雄訳）『イギリス労働史研究』、1968年、

31 ページ。

- 3) リュック・ブノワ (加藤節子訳) 『フランス順歴の職人たち』(文庫クセジュ), 1970年, 85 ページ。
- 4) ドイツの職人遍歴については, Rainer S. Elkar, *Umriss einer Geschichte der Gesellenbewegungen im Übergang von der frühen Neuzeit zur Neuzeit. Problem-skizze und Zwischenergebnisse*, in: Ders. (Hrsg.), *Deutsches Handwerk im Spätmittelalter und Früher Neuzeit*, Göttingen 1983, S. 85 ff. また, 職人遍歴でドイツと結びつきがあったハンガリーについては, Otto Domonkos, *Zur Wanderung ungarischer Gesellen im 19. Jahrhundert*, in: Klaus Roth, *Handwerk in Mittel- und Südosteuropa. Mobilität, Vermittlung und Wandel im Handwerk des 18. bis 20. Jahrhunderts*, München 1987.
- 5) Rainer S. Elkar, *Die Mühsal der Walz. Selbstzeugnisse wandernder Handwerks-gesellen als Quellen für die Sozial- und Bildungsgeschichte des Handwerks im 19. Jahrhundert*, in: II. Internationales Handwerks-geschichtliches Symposium, Bd. 1. Veszprém 1983, S. 304.
- 6) 15—16 世紀の遍歴強制の導入については, Knut Schulz, *Handwerksgesellen und Lohnarbeiter. Untersuchungen zur oberrheinischen und oberdeutschen Stadtgeschichte des 14. bis 17. Jahrhundert*, Sigmaringen 1985, 272 ff. また 18 世紀の遍歴強制については, Klaus J. Bade, *Altes Handwerk, Wanderzwang und Gute Polizey: Gesellnwanderung zwischen Zunftökonomie und Gewerbe-reform*, in: *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 69. Bd. 1982, S. 1 f.
- 7) Rudolf Wissel, *Des alten Handwerks Rechts und Gewohnheit*, Bd. I, Berlin 1971, S. 449.
- 8) *Gut Gesell', und du mußt wandern. Aus dem Reisetagebuche des wandernden Leinenwebergesellen Benjamin Riedel 1803—1816*, bearbeitet und herausgegeben von Friedrich Zollhoefer, Goslar 1938.
- 9) Ebd. S. 74.
- 10) Ebd. S. 77 f, 86.
- 11) Ebd. S. 173 f.
- 12) そのような研究として, Georg Schanz, *Zur Geschichte der Gesellenwanderungen im Mittelalter*, in: *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, 28. Bd., 1877, S. 313 ff. R. S. Elkar, *Schola migration, Überlegungen und Thesen zur neuzeitlichen Geschichte der Gesellenwanderungen aus der Perspektive*

- quantitativer Untersuchungen, in: Roth, a. a. O. Helmut Bräuer, Überlegungen zur Auswertung von Wanderbüchern, in: II. International. Handwerksge-schichtl. Symposium, Bd. 1, a. a. O., S. 273 ff.
- 13) キールについては, Wissel, a. a. O., S. 348 f. オスナブリュックについては, Niedersächsisches Staatsarchiv Osnabrück, Dep. 3 b X Stadt Osn. Nr. 5: Ge-sellen-Buch. Vorinnen sich diejenige Buchbinder-Gesellen so hier in Osnabrück anreisen kommen einzuschreiben haben. フランクフルトについては, Heinz Len-hardt, 150 Jahre Gesellenwandern nach Frankfurt a. M. Ein Beitrag zur Kulturgeschichte des deutschen Handwerks nach den Fremdbüchern des Frankfurter Buchbinderhandwerks von 1712—1868, Frankfurt a. M. 1938. Franz Lerner, Die Lage der Buchbinder im Ausgang des 18. Jahrhunderts, in: Ders., Mit Gunst, Meister und Gesellen eines ehrbaren Handwerks, Frankfurt a. M. 1987, S. 208 ff. 以下の図表は, すべてこれらの資料から作成した。
- 14) F. Lerner, Eine Statistik der Handwerksgesellen in Frankfurt a. M. vom Jahre 1762, in: Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, 29. Bd. 1929, S. 174 ff.
- 15) Wissel, a. a. O., S. 326 ff. Ernst Mummenhof, Der Handwerker in der Ver-gangenheit, Leipzig 1901, S. 81. 職人宿を含む中世以来の宿の歴史については, Johanna Kachel, Herberge und Gastwirtschaft in Deutschland bis zum 17. Jahrhundert, Stuttgart 1924. ムメンホーフによれば, イギリスやフランスでは遍歴強制がなかったために, 「贈与」もなかったという。
- 16) Wilfried Reininghaus, Die Migration der Handwerksgesellen in der Zeit der Entstehung ihrer Gilden (14. / 15. Jahrhundert), in: Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, Bd. 68, 1981, S. 14 f.
- 17) Schulz, a. a. O. こうした傾向は, 南ドイツの都市バンベルク, レーゲンスブルク, ニュルンベルクにかんする R・S・エルカールの事例研究にも共通してみられ, バンベルクの場合には7割以上が周辺フランケン地方の出身で占められ, レーゲンスブルクのろくろ, 銅鍛冶および織布職人の出身地はとくにフランケン, オーバーファルツおよびバイエルンが多く, ニュルンベルクではとくにフランケン, ザクセンの出身が多かった。こうした遍歴圏の形成に無視しえない影響をおよぼしたのは宗教であり, とくにカトリック圏とプロテスタント圏とは, 相互にまったく排他的な独立遍歴圏を形成するほどではなかったが, ある程度分離傾向をもっていたことは否めないようである。また, 南ドイツのアウクスブルクの手工業職人にかんするライトの研究によれば, 18世紀のアウクスブルクの遍歴職人の出身地の北限

は一般に中部ドイツのマクデブルク周辺にみいだされ、東ドイツや西北ドイツからの遍歴はきわめて少ない。Vgl. R. S. Elkar, *Wandernde Gesellen in und aus Oberdeutschland. Quantitative Studien zur Sozialgeschichte des Handwerks vom 17. bis zum 19. Jahrhundert*, in: Ulrich Engelhardt (Hrsg.), *Handwerker in der Industrialisierung. Lage, Kultur und Politik vom späten 18. bis frühe 20. Jahrhundert*, Stuttgart 1984, S. 262 ff. Reinhold Reith, *Arbeits- und Lebensweise im städtischen Handwerk. Zur Sozialgeschichte Augsburger Handwerksgelesen im 18. Jahrhundert (1700—1806)*, Göttingen 1988, S. 110 ff.

- 18) W. Reininghaus, *Vereinigungen der Handwerksgelesen in Hessen-Kassel vom 16. bis zum 19. Jahrhundert*, in: *Hessisches Jahrbuch für Landesgeschichte*, 31. Bd. 1981, S. 134 f.
- 19) Albrecht Bruns, *Die Arbeitsverhältnisse der Lehrlinge und Gelesen im städtischen Handwerk in Westdeutschland bis 1800*, Köln 1938, S. 118.
- 20) マルクの手工業については、W. Reininghaus, *Zünfte, Städte und Staat in der Grafschaft Mark*, Münster 1989. Wilhelm Schulte, *Iserlohn. Geschichte einer Stadt*, 2 Bde, Iserlohn 1937—38. また、拙著『都市と市民社会—近代ドイツ都市史—』, 1988年、も参照されたい。
- 21) ウェストファーレンの職人遍歴については、M. Pieper-Lippe und O. Aschauer, *Oberdeutsche Bauhandwerker in Westfalen. Untersuchungen zur gewerblichen Wanderbewegung, besonders vom 17. und bis zum 19. Jahrhundert, unter Einbeziehung des Wanderhandels*, in: *Westfälische Forschungen*, 20, 1967. Helmut Lahrkamp, *Wanderbewegungen im 18. Jahrhundert, Tiroler Maurer, skandinavische Buchdrucker, böhmische Glashändler und italienische Kaminfeger in Münster*, in: *Westfälische Forschungen*, 26, 1973. ただし、これらの研究でとりあげられているウェストファーレンへの移動は「遍歴」というより、「出稼ぎ」の性格をもっているとみなされる。
- 22) Hermann Lenzen, *Lehrlinge und Gelesen in der Reichsstadt Köln. Ein Beitrag zur Wirtschafts- und Sozialgeschichte des deutschen Volkes*, Diss. Köln 1920, S. 219 f.
- 23) Carsten Küther, *Menschen auf der Straße. Vagierende Unterschichten in Bayern, Franken und Schwaben in der zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts*, Göttingen 1983, S. 60.
- 24) *Gut Gezell*, a. a. O., S. 43 f. 48.
- 25) Chr. Wilh. Bechstedt, *Meine Handwerksburschenzeit 1805—1810*, in: Wolf-

ram Fischer, Quellen zur Geschichte des deutschen Handwerks, Selbstzeugnisse  
seit der Reformationszeit, Göttingen 1957, S. 113 f.

(一橋大学教授)